

# 娘と菖蒲湯

緑区

むかしむかし、今の緑区、十日市場町の辺りに、それはそれは美しい娘がいました。娘の器量の良さはもちろんのこと、日頃の優しい身のこなしは、その娘の親はおろか、村人達も村の看板娘として自慢するほどでした。

ところで、その娘のところへ、いつ頃からか、前髪立ちで小袖を着た若い男が通うようになりました。娘と男は、思い思われる仲となりました。でも不思議なことに、こんなに仲がよく心が通じ合う二人なのに、男は娘に自分の名前はおろか、どこに住んでいるのかも教えません。

それに、村人達もだれ一人としてその男の顔を知りません。

「せめて、あなたのお名前だけでも、この私に。」

娘が聞いても、男はただ口元に笑みを浮かべるだけで、決して自分の身元を明かそうとはしませんでした。

男の子供を宿した娘は、親に身ごもっていることを打ち明け、合わせて、ふに落ちない男の素性について相談をかけたのです。親は娘の耳元でささやきました。

「ひよつとすると、あの若い男は山に住む大蛇じゃないかな。今夜やって来たら、ためしにこの縫い針で体のどこかを刺してみるがいい。」

その夜、娘は訪れて来た男に、親から教えられた通り、縫い針を腹へかいたばいさしました。案の定、男はそれっきり、娘の前からぶつりと姿を消してしまいました。

村人達は手分けをして山へ入り、看板娘へ言い寄った蛇を探しました。と、ある一人が朽ち果てた木の根元にある穴から若者に化けた蛇の苦しむ声を聞き、そつと耳をすますと、

「苦しい、ああ苦しい。鉄の毒が体へ回って来た。もうおれはだめかもしれないが、娘のお腹に残した子供さえ元気で育てば……。菖蒲湯に入れなければ、後は大丈夫だ。」

と言っているではありませんか。  
村人から知らせを受けた娘は早速菖蒲湯に入ると、蛇の子は、体の外へ流れてしまいました。五月五日のことです。

そのことがあってから、この日には、村では蛇から身を守るため、屋根に菖蒲の葉をさしたり、菖蒲湯に入るならわしが生まれました。